

## 刊行にあたって

---

3つの出会いが本書の刊行を可能にした。

第1の出会い —— 眞坂信夫先生との出会い。昭和53年3月、東京歯科大学（第83期）を卒業し、近郊の歯科医院に勤めた後、同期の山口修一先生（シカゴにて開業）、大澤有輝先生とアメリカ歯科事情を遊学。昭和54年12月、アメリカ遊学で合流した同期の愛知徹也先生の紹介で、眞坂信夫先生（理工学教室）の京町歯科（川崎市）にお世話になった。

眞坂先生には歯科臨床の基礎と研鑽の態度と姿勢を教えていただいた。なかでも、自分の臨床をみるうえで口腔内写真・模型・X線・記録チャートなどの資料をしっかりと取得することは、後の『接着歯科臨床』を構築するうえで大いに役立った。昭和55年、同期の中村光夫先生の口添えで、東京医科歯科大学・医療器材研究所の中林宣男教授よりオルソマイト、増原英一教授よりK-セメントの臨床治験を眞坂先生が依頼されたことで、接着剤の歯科臨床導入の先駆け環境に遭遇できた。眞坂先生との出会いがなかったら「接着」との関わりもなく、接着が歯科臨床にもたらしてくれた多くの恵みを誌上に表現することはできなかったと思う。

第2の出会い —— 患者様との出会い。眞坂歯科医院での7年の研鑽時期を経て昭和62年1月15日に、生まれ育った平塚の地で諸星歯科医院を開院した。開院して以来、接着歯科臨床を基礎にした歯科診療を行ってきた。ここに提示した接着歯科臨床は、多くの患者様に育てられ、時には教えられて築きあげたものである。

治療が成功したときはともに喜び、長期にわたり患者様の口腔機能の維持安定に貢献できるよう切磋琢磨してきた記録であり結果である。そして、接着歯科臨床がなければ、多くの患者様とたくさんの喜びを享受できなかったと思う。

第3の出会い —— 次世代への継承者との出会い。今日、接着歯科臨床は、製造企業や販売企業による正しい材料の取り扱いの周知によって広く歯科臨床に応用され始めた。しかしながら、次世代を担う臨床歯科医にとって、接着歯科臨床の長所は何なのか、どうすれば最大の臨床効果が期待できるだろうか。患者様への説明責任の視点に立って、長期経過の接着歯科臨床から学べることは何か。これらを解決するべく筆者は日本接着歯学会や各種講演会で言及してきたが、本書では紙面に限りがあるので、歯根破折の保存治療への応用についてのみ提示した。

患者様の歯を救い、少しでも長く機能させるための接着歯科臨床を、日常臨床に応用していただければと思う。本書が、若い歯科医師の接着歯科臨床研究を行ううえで、少しでも参考になれば幸いである。

2013年10月

諸星裕夫

